

目次

- 巻頭言：障害科学学会 会長 四日市章 1
- 障害科学学会第12回総会仮総会報告 3
- 受賞者紹介：研究奨励賞、実践賞、優秀論文賞受賞者 5
- 第12回障害科学学会研究発表報告・レポート 6
- 前年度受賞者講演レポート 10
- 記念講演会（ご退職記念講演）レポート 11
- 学会企画講演会[障害者政策・特別支援教育政策の動向と学術研究の役割] 14
- 研究室紹介 茨城大学 細川美由紀研究室 15
- 会員・同窓生書籍紹介 17
- 事務局からのお知らせ・編集後記 18

巻頭言：四日市章障害科学学会長（筑波大学 名誉教授）

会長就任のごあいさつ

2016年度の障害科学学会の大会が平成27年3月4日に行われました。日頃の業務や研究、学習などで忙しい中、先生方や学類、大学院の学生さんが集まり、研究の発表、また研究や実践に功績を挙げられた会員の表彰や昨年度受賞者の講演が行われました。そして、今年度で退職される廣田栄子先生から、これまでの研究活動を総括された分かりやすく示唆に富んだご講演を頂き、さらに柘植雅義先生による、最近の話題であるエビデンスに基づく教育政策のなど興味深い講義が行われました。たくさ



会長 四日市章先生

んの知識や情報を得ることのできた、貴重な一日だったと思います。ご参加の皆様、ご苦労様でした。

総会の時には、私もご挨拶をさせていただき、最近、心に残っていたことを少し話しました。この会報の紙面をお借りして、改めてその時の話題を紹介させて頂きたいと思います。

それは、たまたま私が家内に誘われて、水戸市にある茨城県近代美術館に東山魁夷の唐招提寺御影堂障壁画展を見に行った時の話です。唐招提寺の壁画や襖絵の公開自体も珍しいそうでしたが、それらは、魁夷が10年近くを費やして描き上げた、迫力のある、すばらしいものでした。その一方で、それらの美術品の鑑賞とともに、唐招提寺を開いた鑑真和上の説明を読んで改めて感慨を覚えました。鑑真が苦労して唐から奈良時代の日本へ渡ってきて仏教の戒律を広めたことは、中学や高校の歴史で学んだことで、だれでも知っていることかと思えます。しかし、その説明を読んだ時に、なぜ鑑真は命がけの危険な思いをしながら何度も日本に渡ろうとしたのだろうか、ということを改めて思いました。展示の説明などの資料から、鑑真は、仏の教えは伝えてこそ生きる、だから私は日本へ行く。仏のためなら命をも惜しまない、という強い「思い」や僧としての「使命感」から、日本へ渡ることを決意したのかと思われました。結局、鑑真は何度も渡航に失敗し、10年にも及ぶ艱難辛苦の末、眼も悪くしてしまいましたが、6度目の挑戦でやっと日本にたどり着きました。また、鑑真を日本に招くために唐に渡った二人の日本人の僧も、鑑真に出会うために、やはり10年近い辛苦の年月を唐で過ごしています。彼らをここまで動かしたものは何だったのかは、古い歴史のことで、また心の内面のことであり、はっきりとは分からないようです。当時の唐や日本の、社会的、宗教的な背景などから、そのような行動が必要とされる条件もあったようです。しかし、それにしてもです。どうしてそんな努力をしたのだろうか、できたのだろうかと思いました。鑑真和上や彼を招くために唐に渡った2人の日本人僧、そして東

山魁夷、いずれの人も、10年を超える歳月を、ひとつのことを見据えて、苦しいこと、成果が明確に見えないことに努力し続けたということに対して、人の思いのもつ力のすごさを、そしてまた、おそらくその行為が彼らにどれだけ大きなものをもたらしたのだろうか、ということを感じました。

一方、私にこのような思いを生じさせたのは、私が現職を離れ、これまでの、そして、現在の社会や大学の状況を、立ち止まって見ているからかなとも思いました。現代の社会は高度に組織化されています。その中で個人は、組織を効率的・効果的に動かすための一部となって、組織としての活動の成果を、人々の目に見える、明確な形で示すことを求められているようです。このことは、社会全体としての資産を効果的に生み出すためにはよい方法であると思われまます。しかしそのような環境では、個人としての自由な存在感や自己実現の楽しさといった感覚が得られにくいようにも感じます。現代は科学が重視される時代であり、エビデンスに基づく教育や組織運営の考え方は大切であり、必要なことだと思います。しかしその一方で、人の眼には見えないもの、見えにくいものの重要性も、やはり見失ってはならないような気もします。人には見えない部分が必ずあるようにも思います。鑑真の行動は、どんなエビデンスに基づいたのでしょうか。おそらく、科学的、客観的な情報ではなく、彼自身の思いや使命感だったのでしょう。現代的な感覚では、思いや使命感は、時代遅れのような気もします。しかし、そういった気持ちをもちたいという思いも、同時にあるのではないのでしょうか。これから展開していくであろう、エビデンスに基づく障害児の教育や福祉を、どう考え、どう進めて行くのか、行きたいのかは、これからの大きな課題のように思われます。共生社会という理念の実現に向けた動きも進められようとしていく中、エビデンスと一緒に考えなければならぬものもきっとあると思います。そして、それは、人が生涯を通して、自分の生き方として考える問題でもあると思います。

時代が変化し、それにもなまって人々の考え方も少しずつ変わって行きます。「少しずつ」変わっていくので、その時々の変化はわずかであり、大きく変わったんだ、という事実認識を、その都度得にくいのも人間の特性でしょうか。まあこのくらいは、大きな変化ではない、という感覚は誰にでもあるでしょう。しかし、私たち一人ひとり認識の範囲を超えた流れの中で、過去がそうであったように、一人ひとりが気づかないうちに全体の状況は大きく変わっていくようです。

昨年度から続いている、この学会や同窓会の役割や位置づけの明確化も、時代の流の中で大きな課題となっています。今年度は、同窓会や学会のあり方に関して、会員の皆様にもアンケートへのご協力を頂きましたが、明確な方向性はなかなか見いだせないように思いました。時代が変わり、関係する人々の、同窓会や学会への期待も少しずつ変わって行くのでしょうか。このような流れの中で、我々は、学会や同窓会に対して何を期待し、そこから何を得たいと思うのか、また、何をすべきなのかについて、エビデンスに基づきながら、迷い、議論しつつ、解決の道筋を探していくことが求められているのかと思います。

会員諸氏の今後のご活躍を期待するとともに、本学会が、皆様にとってより役立つようになるための、さまざまなご意見やご希望、またご支援を期待致したく、お願いする次第です。



仮総会の様子



障害科学学会第12回総会仮総会報告

障害科学学会第12回総会が平成29年3月4日(土)に筑波大学(第2エリア2H201)にて開催されましたが、出席者は議事についての審議を開始した時点で定員数に達せず、仮総会となりました。以下に仮総会での決定事項を示します。

これらの決定事項につきまして、反対意見がございましたら、6月末日までに学会事務局まで文書にてその旨申し出てください。正会員の過半数の文書による反対があった場合に、総会の決議としての効力を失うこととなります。

- 日時：平成29年3月4日(土)12:15~12:45
- 場所：筑波大学 第2エリア2H201

I 開会の辞

米田事務局長より、学会規則による定数に達していないため、総会が未成立である旨案内があり、第12回総会が仮総会として開催された。

II 会長の挨拶

四日市章会長より、総会開催に当たっての挨拶が述べられた。

Ⅲ 議案

加藤靖佳監事の司会により、以下の議事が進行された。

1. 平成 27 年度総会議事録（案）の確認（資料 1）

前回の議事要旨が示され、原案通り承認された。

2. 平成 28 年度事業報告（案）（資料 2）

資料に基づき、以下の事業報告（案）が提案され、審議の結果、原案通り承認された。

1) 刊行事業：機関誌 41 巻の刊行・40 巻のつくばリポジトリ掲載手続き（掲載待ち）および J-STAGE 掲載手続き（手続き進行中）、会報 10 号、研究発表会論文集の刊行

2) 定例事業：第 12 回総会、研究発表会、講演会（学会企画講演、最終講義）、受賞者講演、若手研究者、優秀研究者、優秀実践者への顕彰

3) その他：ホームページの移設・リニューアル、同窓会機能についての Web アンケートの実施

3. 平成 28 年度決算（案）（資料 3）

資料に基づき、決算（案）が提案され、審議の結果、原案通り承認された。

4. 平成 29 年度事業計画（案）（資料 4・5・6）

資料に基づき、以下の事業計画（案）が提案され、審議の結果、原案通り承認された。

1) 刊行事業：機関誌 42 巻の刊行・41

巻

2) のつくばリポジトリ・J-STAGE 掲載、会報 11 号の刊行、研究発表会論文集の刊行

3) 定例事業：第 13 回総会、研究発表会、講演会・シンポジウム等の開催、受賞者講演の開催、若手研究者、優秀研究者、優秀実践者への顕彰、学会役員の改選

4) その他：学会のあり方に関する検討

5. 平成 29 年度予算（案）（資料 7）

資料に基づき、平成 29 年度予算（案）が提案され、審議の結果、原案どおり承認された。

6. 入会・退会の承認（資料 8）

平成 29 年 2 月 13 日現在、会員総数は 716 名であることが報告された。また、新入会員 22 名（一般会員 7 名・学生会員 15 名）の入会と退会会員 3 名（一般会員 3 名）の退会が示され、審議の結果、承認された。

7. 平成 29 年度総会開催日について

平成 29 年度総会の開催は、平成 30 年 3 月 3 日（土）筑波大学第 2 エリアと提案され、審議の結果、承認された。

8. その他

なし

Ⅳ 閉会の辞

米田事務局長より、閉会の案内が行われた。

受賞者紹介

第12回理事会において協議の結果、研究奨励賞、実践賞、優秀論文賞受賞者は、下記の方々に決定しました。各賞を受賞された先生には、次回大会にて、小講演をいただく予定です。

研究奨励賞

猪俣 朋恵（筑波大学）

（主要業績）猪俣朋恵, 宇野彰, 酒井厚, 春原則子. 年長児のひらがなの読み書き習得に関わる認知能力と家庭での読み書き関連活動. 音声言語医学, 57巻2号, 208-216, 2016

実践賞

五味 洋一（筑波大学）

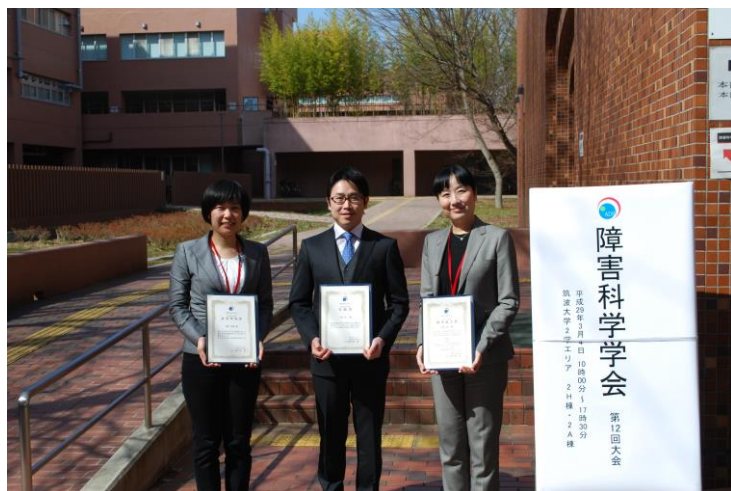
（主要実践活動）

「国立重度知的障害総合施設のぞみ園での研究員の経験を活かした強度行動障害に関わる研修等の実績ならびに筑波大学での発達障害の学習支援における実績が評価されました。」

優秀論文賞

本間 貴子（筑波大学附属大塚特別支援学校）

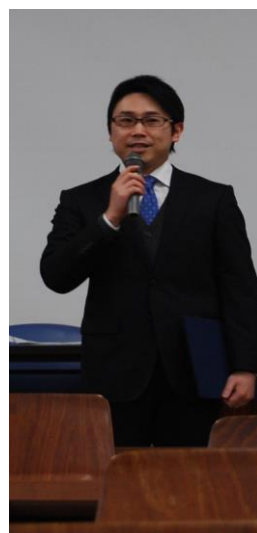
タイトル: 1940年代ニューヨーク市公立学校精神遅滞学級における「職業教育（Occupational Education）」の理念とコア・カリキュラムの実態



受賞された三名の先生方
左から猪俣氏、五味氏、本間氏



猪俣氏受賞のスピーチ



受賞された五味氏（左）、本間氏
（右）のスピーチ

第12回障害科学学会 研究発表報告・レポート

今年度の研究発表会も、障害科学に関する分野について、以下に挙げた10件のポスター発表が行われ、活発な質疑応答、議論が行われました。

ポスター発表

- (1) 岡典子（筑波大学）
日本の自立生活センター創立初期における「自立生活」理念の形成過程
-ヒューマンケア協会の創立課程を通して-
- (2) 中山忠政（弘前大学）
発達障害者支援法の改正-改正にみられた3つの特徴-
- (3) 丹野傑史（長野大学）
義務制前後における肢体不自由教育の変容
-東京都及び都立光明養護学校を中心に-
- (4) 山ノ上奏・安藤隆男（筑波大学）
肢体不自由者の就労継続意識
- (5) 内海友加利・山本瑠美・安藤隆男（筑波大学）
日越共同授業研究の成果と課題Ⅰ
- (6) 山本瑠美・内海友加利・安藤隆男（筑波大学）
日越共同授業研究の成果と課題Ⅱ
- (7) 趙成河・園山繁樹（筑波大学）
選択性緘黙の有病率に関する文献的検討
- (8) Ee Rea Hong・Aya Fujiawara・Shigeki Soyama
(University of Tsukuba)
School Refusal Behavior in Students with Intellectual Disabilities and Its Treatments.
An overview and Implications for Future Research
- (9) 裴虹・園山繁樹（筑波大学）
中国のインクルーシブ教育の新たな動向
- (10) 白思琦・三枝里江・鄭仁豪（筑波大学）
聴覚障害大学生における社会人基礎力の特徴に関する研究-アルバイト経験と社会人基礎力との関連の検討-
- (11) 湯浅哲也・加藤靖佳（筑波大学）
「音韻教授法」に収録された聾児の音声の検討
-発話の持続時間を指標に-
- (12) 林珊竹・前川久樹・鄭仁豪（筑波大学）
聴覚障害者の視覚的注意の特徴に関する研究
-中心視野と周辺視野との活用の検討



ポスター発表の様子

ポスター発表

人間総合科学研究科障害科学専攻前期課程 1 年

エカ・クスマ・ワルダニ：

1. 内海友加利・山本瑠実・安藤隆男

日越共同授業研究の成果と課題Ⅰ

キーワード：日越共同授業研究 重複障害児の指導
研修ニーズ

ベトナムでは肢体不自由や病弱が特殊教育の対象になっていない。そのため、彼らは家庭または施設で生活を送っていると言われている。しかし、実際、軽中度の肢体不自由や重複障害児は視覚障害特殊学校や聴覚障害特殊学校に在籍する場合がある。最近、特殊学校において肢体不自由や重複障害児の人数が増えつづけていて、教育的ニーズが高まっていることが指摘されてきた。一方、日本は半世紀から重度の肢体不自由や重複障害児の対応に経験を積んできて、特別支援教育における教員の専門性が国際的特別支援教育に貢献できると期待できる。このように、筑波大学は平成 25 年から日越共同授業研究を実施しており、本報告は平成 27 年の 3 年目の研究からまとめたベトナムにおける日越共同授業研究から得た成果と課題を明らかにすることを目的にした。

3 年目の共同授業研究はベトナムで行い、参加者は事業 2 年目（平成 26 年）に、日本での研修を受けたベトナム人の教員 4 人と日本から派遣された特別支援学校教員 4 人、合わせて 8 人であった。実施前に把握したベトナム人教員のニーズをもとに日本の教員はベトナム人教員が担当する子どもに対して共同授業研究を展開して、最後に全体カンファレンスを行った。ここで得た成果と課題を共有し、音声による記録を行った。

結果として、日本人教員による子どもの実態に応じた指導に対して、ベトナム人教員が関心を高め、ベトナム人教員の具体的な課題意識へと変容が見られた。一方、日本人教員にとって、他国で共同授

業研究を実施することで、積み重ねた専門性をどう発揮するか、またそれを相手にどう伝えるかという言語化することについて省みる機会となった。成果のまとめとして、国際的な共同授業研究を行うことによって支援する側やされる側双方の専門性が向上させるために有効であることが明らかになった。一方、課題としてベトナムでは ①子どもの実態に応じた授業展開がなされたものの、教材教具や補助具の工夫がいまだに難しいこと、②教員人数の不足による個別指導の不十分さが明らかになった。そして、なによりも国際的共同授業研究を行う際は基盤となる考え方を十分に共有し、現地の文化に合った方法で子どもの学びに対する質的保障を考える必要があるということがわかった。

以上の研究結果から以下のような感想をもった。研究まとめにも述べられたように、国際的協力事業を行う際は、支援する現地の実態を十分に把握し、それに応じて支援方法を考えることがとても大事である。また、支援することは必ずしも与えるだけに留まらず、与えることによって何かを得ることが必ずあることを学んだ。したがって、国際的協力事業は双方の利益を考えた上で実施すべきことが重要である。

2. 山本瑠実・内海友加利・安藤隆男

日越共同授業研究の成果と課題Ⅱ

キーワード：日越共同授業研究 ホーチミン市の区立知的障害特殊学校の現状 教員のニーズ

上記の研究発表と関連して、この研究では、日本人の研究者によるホーチミン市内にある 3 つの区の重複障害児が在学する公立知的障害特殊学校とインクルーシブ教育の支援開発センターへの見学の結果について報告された。見学期間は平成 28 年 12 月 5 日～7 日の 3 日間であった。

見学の結果は二つから構成し、「重複障害児の現状」と「教員のニーズ」であった。

「重複障害児の現状」では①ホーチミン市内の知的障害学校という名前であっても、発達障害や重複障害児が在籍していること；②前の研究にも指摘があったが、児童の多いクラスの場合、例えば21人の児童に対して指導する教員は2人しかいないという現状；③見学した学校には脳性まひの子どもが比率的に高いが、彼らは他の子どもと同様に教科指導などを受け、重複障害児に対する特別なプログラムはなかった；④脳性まひ児に教育実習生がついていた。一方、「教員のニーズ」では、重複障害教育に関する知識や脳性まひ児との接し方などのニーズについてベトナム人教員たちから意見が出された。また、見学に同行したインクルーシブ教育の支援開発センター長によれば、現職研修をセンターとして行っているが、制度化されていないため、研修を受けない教員が現場ではまだ多いことが指摘された。

ベトナムでは特殊教育の対象は単一障害が中心となっており、重複障害は対象となっていない。しかし、学校によっては重複障害児を受け入れる学校もあるため、重複障害児の教育的対応しかたのニーズが高まることが分かった。一方、大学では重複障害教育が教員養成の履修科目の対象となっていないため、学校現場で直接指導をする教員は重複障害児とどう接したらいいかわからない人は少なくない。このように、現職研修のニーズが高まることや、教員養成の授業カリキュラムの見直しや現職研修の制度化が課題として捉えられた。

修士論文構想発表

- (1) 石田祐貴（指導教員：鄭仁豪）
聴覚障害者のコード化における視覚的情報処理方略の特徴に関する研究
- (2) 岡崎雅（指導教員：柘植雅義）
共生社会の実現に向けた障害者に関する映像表現の妥当性の検討
- (3) 萩野恵（指導教員：左藤敦子）
聴覚障害幼児への読み聞かせ活動をどのように捉えるのか

- (4) 山崎詩奈子（指導教員：宮本昌子）
歌唱・リズムが発話非流暢性に与える影響の検討
- (5) 長山慎太郎（指導教員：柘植雅義）
小学校通常学級におけるクラスワイドな支援の効果検証
- (6) エカクスマ ワルダニ（指導教員：柘植雅義）
インドネシア国西部ジャワ州バンドン市の知的障害特別支援学校における学習評価に関する実態調査
- (7) 鄭毅（指導教員：柘植雅義）
中国における通級指導教室制度の沿革に関する研究

レポート

人間総合科学研究科障害科学専攻前期課程1年
坂本敦子

(1) 石田祐貴（指導教員：鄭仁豪）

本構想の目的は、言語的符号化が可能な視覚的情報に対する聴覚障害者の記憶過程におけるコード化の特徴を明らかにすることである。研究1では、高等教育機関に在籍する聴者（聴者群、手話ができる聴者群）と聴覚障害者（口話優位群、口話・手話併用群・手話優位群）を対象に、言語的符号化が可能な様々な視覚的刺激に対する記憶過程においてどのようなコードを用いるのかを、聴者と聴覚障害者、聴覚障害者のコミュニケーションモードの違いとの関連から明らかにする。研究2では、研究1で明らかにされたそれぞれの刺激を記憶する際に用いるコードの中から、具体的・抽象的といった側面における刺激の性質の違いによってどのコードを優位に用いるのかについてのコード化方略について検討する。言語的符号化が可能な視覚的情報に対する聴覚障害者の記憶過程におけるコード化の特徴は、二重課題法を用いた抑制効果により検討する。発表では、手続きに用いるディスプレイを再生するなど具体的に提示され理解しやすかった。

(2)岡崎雅（指導教員：柘植雅義）

本構想の目的は、共生社会を推進する手立てとして映像が示す効果に着目し、研究1では健常者が知的障害者を理解し意識を改善することができる映像表現について検討し映像を作成すること。研究2では、作成した映像の妥当性について検証することである。研究1の方法は、先行研究で取り扱った映像や既成の障害者をテーマとした映像などから健常者の障害者に向けた意識を好意的に変化させることができるような映像表現を検討して映像を作成する。研究2の方法は、大学生と大学院生100名（10名×10回を予定）を対象として研究1で作成した映像を視聴してもらい、対象者の属性や特性と視聴前後における質問紙（態度変容尺度等）や自由記述により調査を行う。様々な映像を容易に視聴できる現代、知的障害者を理解し意識を改善するための映像に着目し、妥当性を検討することは重要であると考え。

(3)萩野恵（指導教員：左藤敦子）

本構想の目的は、特別支援学校（聴覚障害）幼稚園部の聴覚障害児に対する教諭の絵本の読み聞かせ活動における特徴を明らかにすることである。方法は、特別支援学校（幼稚園）4歳児クラス教諭2名と5歳児クラス教諭2名を対象とし、教諭がクラスの聴覚障害児に絵本を読んでいる場面を記録し、教諭に記録を見せて面接を実施する。教諭と子どもとの相互作用に着目し、読み聞かせをする上での配慮や発問の意図などを細分化して分析する。発話内容のカテゴリー化等を行い、分析結果と対象者の面接結果を対応付けて読み聞かせの特徴を検討する。聴覚障害児に対する読み聞かせの特徴を読み聞かせ者と子どもとの相互作用に着目して明らかにする構想はとても興味深い。

(4)山崎詩奈子（指導教員：宮本昌子）

本構想の目的は、吃音児に対するリズムと歌唱活動が発話流暢性に与える影響について検討することである。方法は、吃音症状のある小学校低学年の男児15名程度に対し、リズム打ち課題、歌唱課題、

対象児の音楽に対する認識や特性を明らかにするための質問紙調査を実施する。分析方法は、リズム打ち課題の前後における発話流暢性の頻度の比較、歌唱中・後に生起する発話流暢性の分析を行い、質問紙の結果から対象児の音楽活動の経験や好みと発話非流暢性の関連性を検討する。先行研究では、歌唱やリズムが発話流暢性に影響を与える可能性は検討されているが、活動時に限定された現象か、残存するか明らかにされていない。活動時に直接介入して影響を検討することに意義があり、その結果と対象児の音楽に関する背景との関連性を検討する視点は非常に興味深い。

(5)長山慎太郎（指導教員：柘植雅義）

本構想の目的は、小学校通常学級の担任教師に対するクラスワイドな支援に関するコンサルテーションの効果と相互依存型集団随伴性の適用の有効性を明らかにすることとである。方法は、小学校通常学級に在籍する3年生から5年生のうち、研究協力を得られる学級（2学級生徒数約80名）を対象として各教室にて実施する。担任と学級での行動目標となる標的行動を選定し、児童は毎日帰りの会前に標的行動に対する自己評価を記入し、その内容に応じて教師は賞賛し、蓄積された得点が一定以上の基準に到達した班にはシールを付与するなど担任とルールを決めて実施するなどである。先行研究や方法等も明確に示され分かりやすい発表であった。

(6)エカ クスマ ワルダニ（指導教員：柘植雅義）

本構想の目的は、インドネシアの知的障害特別支援学校の教員による個別の学習評価がどのように実施されているか明らかにすることである。研究1の方法は、インドネシア国西部ジャワ州バンドン市内知的障害特別支援学校における教員約500名を対象として、質問紙調査〔フェイスシート、学習評価の実施順序、個別の教育支援計画・個別の指導計画の立案と実施に関する項目等〕と個別の学習評価を実施する際に実態把握と目標設定の段階で生じる課題とその理由について自由記述を実施する。研

究2の方法は、教員約5名を対象として、研究1で明らかになった課題とその解決法について面接法を用いて検討する。インドネシアにおける知的障害特別支援学校の個別の学習評価に関する先行研究があまりなされていないことから、非常に意味のある構想であると考ええる。

(7) 鄭毅（指導教員：柘植雅義）

本構想の目的は、中国における通級指導教室制度の沿革を随伴就読制度の観点から明らかにすることである。1994年随伴就読制度が中国で法律化されてから2016年特殊教育資源教室が制度化されるまでの30年間に着目し、通級による指導の制度が先に確立し通級指導教室が長年にわたり確立された中国の特殊教育の特徴を把握する。方法は、中国政府から発行された年刊「中国教育年鑑」を30年分以上、また「中国全国教育事業発展統計公報」を取り上げ、1980年から現時点までを4つの年代に分け、試行実践の展開と政策法规の変化に分けて分析する。先行研究において資源教室の沿革を歴史的な視点から分析し明らかにしたものはないため、過去30年間のデータを分析することは意義があると考ええる。

前年度受賞者講演レポート

研究奨励賞

講演者：茂木 成友（筑波大学）

テーマ：「障害科学から学んだこと-学生生活10年を振り返って-」

講演者：野口 代（筑波大学）

テーマ：「認知症ケアと介護者支援」

実践賞

講演者：青木 真純（筑波大学）

司会：米田 宏樹

レポート

人間総合科学研究科障害科学専攻前期課程1年

山崎詩奈子：

茂木成友会員のご講演は、「障害科学から学んだこと-学生生活10年を振り返って-」がテーマであった。講演目的を“論文に記載できない情報を伝える”とされ、論文を作成する際の基本姿勢や研究の意義が主な内容であった。“研究を支えるのは充実した臨床活動が重要で、同時に臨床活動を支えるのは地道な研究である”とご経験から紡がれた言葉は、とても力強く心に響くものであった。臨床と研究は“研究者が頑張れば繋がっていく”といったものではなく、“常に臨床を蓄えておくことが必要”で、“蓄えられた臨床が研究の一端に結びついていく”のであるとの洞察であった。また、研究活動と臨床活動を支えるためには学生生活での経験（興味から少し離れた分野・新しい挑戦・得意なこと・得意なこと・好きなこと）が大切であると述べられた。さらに、ご自身が卒論・修論から博論に進む際に、研究テーマの変更があったとのご経験に触れつつも“実は無駄ではなかった”と回想された。研究に携わる上での基本的な問題意識や考え方、分析手法などは変わらず、経験したことや学んだことには一切の無駄は無い、と強調されていた。最後は“障害科学を中心に据え研究してきたことが充実した学びとなっていた”との言葉で締めくくられ、特にこれから修論に取り組む学生会員にとっては、激励の内容であったと感ずる。

野口代会員のご講演は、「認知症ケアと介護者支援」がテーマであった。その内容は、認知症の行動・心理症状（周辺症状）・BPS（Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia）が発生する介護現場に、スタッフサポート・システム（Support System for Staff (SSS)）を開発、さらにBPSDに対して応用行動分析に基づく支援決定モデルの構築、の研究が主であった。認知症ケアでは薬物療法による死亡率の増加が背景にあり、行動療法的アプローチ・非薬物療法の必要性が望まれ、高齢者福祉の切実な現実が垣間見

られた。「応用行動分析に基づく支援決定モデル」は資料では図になっているが、紙面の都合もあり、できる限り文章化を試みご報告したい。初めに①BPSDが起こるきっかけ・状況を見つける。次に②BPSDの原因・きっかけ（場所、時間、人・関わり方、活動・退屈感、環境、生理的状态、薬）を明らかにする。さらに③BPSDの原因に対応する介入を実施し・BPSDの生じやすい状況を変える。このモデルやシステムを取り入れることで、2カ月しか継続できなかった介入の効果を半年まで伸ばすことができたケースもあるとのことである。この研究は、テーマにもあるように、ケアを必要とする当事者のみの一方的な支援モデルにとどまらず、当事者に寄り添う介護者に対する支援モデルの双方に光を当てている点がとても現実的であると拝察した。

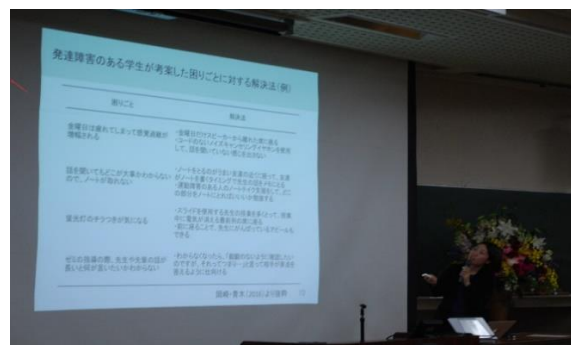
青木真純会員のご講演は、「特別支援教育と障害学生支援」がテーマであった。青木会員は筑波大学アクセシビリティ部門で、障害学生に対しての支援を行っている。本講演の内容は特に、発達障害のある学生に対する合理的配慮について、が主であった。障害学生が困っていることは以下、①ノートが取れない②レポートが書けない③提出物が出せない④スケジュール管理が出来ない、が共通し、これは高等学校までの学習では学んでいないという指摘があった。障害学生それぞれのケースにもよるが、特性ゆえ成績が優秀であれば宿題や提出物を免除されるという配慮があり、困りごとに関する解決法は学ぶ機会がなかったという現状も報告された。障害学生支援は、①認知教育的な視点を取り入れることによって、学習や生活の基盤になる部分を育てていくことが必要であり、②特別支援教育から障害学生支援まで共通したものであるという視点で考え、継続的な支援やサポートが有効である、と締めくくられた。



茂木先生のご講演の様子



野口先生ご講演の様



青木先生ご講演の様

記念講演会（ご退職記念講演）レポート

講演者：廣田 栄子先生（筑波大学 教授）
 司会者：加藤靖佳先生（筑波大学）
 テーマ：「生涯発達科学における聴覚障害児の言語指導」

レポート①

人間総合科学研究科障害科学専攻前期課程1年
石田 祐貴：

本大会の記念講演では、廣田栄子先生に「生涯発達科学における聴覚障害児の言語指導」というテーマでご講演頂いた。

先生がご担当されている生涯発達専攻の基盤にある「生涯発達科学」とは、生誕から死までの生涯の発達過程において遭遇する、心理・社会・教育・保健・医療・福祉等の幅広い領域における諸課題の解決を目指した実践科学を対象とした領域である。講演の全体を通して、この生涯発達科学的な視点を持つことの重要性が随所で述べられていたように思う。

例えば、臨床活動を行う際には、子どもの現段階における目の前の課題のみを見つめるのではなく、今後の発達過程における各段階での課題とそれらの連続性という生涯発達を見通しながらの指導が重要である。それは研究においても同様であり、課題の連続性、系列性、包括性を含めて検討することにより、課題を未然に防ぐことができるだけでなく、同段階のQOLの充実もはかることが可能となる。今後の研究や臨床活動においては、各段階の課題を生涯発達の視点から長期的に、様々な研究分野を含んだ幅広い視点から捉えていくことが重要だと感じた。また、先生の専門である聴覚障害学の分野は、医学・工学・教育学・心理学・社会学など、各時代におけるグローバルな科学に基づいて進展してきており、時代が進むにつれて科学的研究はより一層の進展をみせている。このような包括的な研究分野でのエビデンスを含んだ時代のスタンダードは日々変化していくため、生涯発達科学的なアプローチには知識・実践を常に最新のものに更新していくための、私たちの日々の学びも欠かせないものであると強く実感した。

一方、生涯発達という視点は研究や臨床活動に携わる私たちにも言えることではないだろうか。講演の中で、これまでの先生の研究テーマにおける関心の変容について紹介されており、その背景には先生

自身の人生経験との関連があったというお話が聴けた。私たち自身も未だ「生涯発達」の過程の途中であり、人生において多くの経験を積むにつれて、研究等に対する見方や考え方が変容していくと共に新たに見えてくるものがあるということである。研究や臨床活動を行うにあたり、自身の考え方や捉え方は大きく影響する。更に幅広い視点で研究を捉えられるようになるためにも、研究等に携わる私たち自身も様々な経験を積み重ね、人間的により成長することが大切であるように感じた。

最後に、先生から頂いたメッセージの中で2つの言葉が印象に残った。「有益な知見の研究論文の積み重ね」と「ひとつのウェーブ」である。前者は、近年掲げられているEvidence based Educationの実践には必要不可欠なものであると考える。しかし、有効なevidenceの発見は必ずしも簡単なミッションではなく、1人で成し遂げられることには必ずしも限界があるであろう。後者が意味することは、そのようなミッションには、多くの人々と協同し、ひとつのウェーブのようになって挑戦していく必要があるということである。研究に携わる者として、このような視点を常に持ちながら今後の研究に取り組んでいきたいと思う。

レポート②

人間総合科学研究科障害科学専攻前期課程1年
：萩野 恵

人間系廣田栄子先生からは「生涯発達科学における聴覚障害児の言語指導」というテーマでご講演いただいた。廣田先生のお話から、先生の臨床家としての活動とそこご経験を基にした研究活動の一端を知ることができた。

生涯発達科学とは、生誕から死まで人生の各段階で遭遇するさまざまな課題に注目し、個人から組織・社会といった次元までをも包括した幅広い学問である。そして臨床研究とは、対象者の発達課題から、変化・連続する生涯発達課題の理解と、リハビリテーション支援について研究することであり、従

来の概念に意義付けし、新たな価値を見い出していくことだと学んだ。こうした活動の連続により、問題意識が明確になり、また新たな臨床活動や研究への繋がりが生まれ、生涯発達科学という学問が深まっていく。特に廣田先生が行われていた聴覚障害児に関わる研究は、医療・社会・教育・保健・福祉といった多くの要素の進歩や時代の流れとともに研究動向が変わるものであった。それらを時代の要請として受け止め、研究テーマとして設定することこそが重要であり、生涯発達科学であるとお話であった。

そして生涯発達科学という学問の最大の深みは、臨床家が歳を重ねることで見えてくるものが変化することがあるということであった。例えば廣田先生のお話によれば、臨床家が20歳代の頃は、聴覚障害児の心や言語、行動全般の育ちといった事柄に関心が向くのにに対し、40歳代になると聴覚障害児の家族の気持ちや人生の中の言語療育と子育ての意味、文化と言語の密接な関係に関心が向くようになるということである。これは、言語指導についてのストレスを母親が抱えていることに臨床家が気付いたことがきっかけであった。このお話から「生涯発達科学とは、臨床家の成長と共にある」とも言えよう。

廣田先生の研究史からは、ご自身のライフステージごとの支援パラダイムの変換について、詳しく知ることができた。聴覚障害児の各発達段階において、どのような大人になるべきであるかという課題に対峙し、その答えを想定すること、そしてその活動を繰り返すことで研究者としての視野が形成されていくのだと学んだ。

近年では、幼少期からの人工内耳手術の広まりから、従来の聴覚障害児理解・指導では十分ではなくなってきたと言える。人工内耳という選択は必ずしも聞こえを保障するものではなく、個人差が大きいということ、語音を判別する力に関しては、補聴器であるか人工内耳であるかは関係なく、個人のもつ聴取力に依存しているということが明らかに

なった。どのような選択をした聴覚障害児にとっても、言語発達を最大限に促すこととなるよう子どもを取り巻く環境を整えていく必要があると感じた。具体的には、幼少期からの一貫した言語指導とアセスメントを繰り返しながら、指導者が子どもの躰きを事前に予測し、指導にあたることである。また聴覚障害児の自他認識と障害認識に関しては、ある時急に哲学的になるということではなく、徐々に自他の関係性の高まりによって障害観が深まっていくものであるため、情緒の育ちが人間関係形成への積極性を促すのである。

今後の私の研究においても、研究と臨床は連続上にあるという視点を忘れずに取り組んでいきたい。



廣田先生ご講演の様子



廣田先生への花束贈呈

学会企画講演会

テーマ「障害者政策・特別支援教育政策の
動向と学術研究の役割～“Evidence-
based Education Policy”時代の幕開け～

司会：岡崎慎治先生（筑波大学）

講演者：柘植雅義先生（筑波大学 教授）

レポート①

人間総合科学研究科障害科学専攻前期課程 1 年
長山慎太郎：

学会企画講演会では、柘植雅義先生から「障害者政策・特別支援教育政策の動向と学術研究の役割～“Evidence-based Education Policy”時代の幕開け～」というテーマでご講演いただいた。話題は、次に示すものであった。イントロダクション～研究と実践と政策：その関係性～、1. “Evidence-based Education Policy(EBEP)”とは何か、2. 近年の障害者政策・特別支援教育政策の動向、3. 事例：個々の政策と期待される学術研究、コンクルージョン～EBEP 時代に向けて今後必要と思われる事項～。

講演の中では、Evidence-based の視点で、柘植先生から様々な問いが出され、問いに答えるための必要と思われる学術研究が述べられた。問いは以下の6つであった。

問1「高校における通級による指導は必要か？発達障害のある生徒に必要か？」

「必要ならどのような制度が良いか？」「どのような指導方法が効果的か？」

問2「施行後 10 年が経過した発達障害者支援法をどのように改訂するか？」

問3「日本の障害者政策は、どのような成果と課題があるのか？」

問4「2030 年を見据えて日本の教育は今後どのようにあるべきか？」「日本の教育政策はどのように形成されるべきか？」

問5「日本の特別支援教育の終点は？インクルーシブ教育の終点は？」

問6「その他の問」

中でも、特にこれからの特別支援教育のキーワードとして、強調されたのが高等学校における通級による指導であった。2018 年から高等学校における通級による指導がスタートする。そこで行われる指導や支援の効果をどのようにして測っていくのかについて考えることが重要である。この議論の背景は、2016 年 4 月の障害者差別解消法の施行である。高等学校における特別支援教育が充実することで、小学校、中学校、高校と途切れのない連続した支援が期待できる。

今回、講演を聞いて、「エビデンス」という言葉が何度も繰り返し使われていたことが印象的だった。障害科学専攻で 1 年間学んできて、研究とは何かを考えた時、現時点で私が考える研究とは、いつか誰かのためになるものである。いつかとは明日かもしれないし、10 年後かもしれない。しかし、きっといつか誰かのためになる。まさにこれから、これまで蓄積されてきたエビデンス、そしてこれから蓄積されるエビデンスが教育においてとても重要になってくる。そう考えながら、先行研究を読み返し、修士論文に取り組みたい。

講演の最後には、次のように柘植先生から学生の皆さんへのエールが送られた。

「世界は、ひとつずつ変えることができる（富士フィルム）。そのための方法はいろいろあるが、研究もそのひとつです。ぜひ学生の皆さんにはそういうことを思って研究に励んでほしい」

レポート②

人間総合科学研究科障害科学専攻前期課程 1 年
鄭毅：

平成 29 年 3 月 4 日に行われた第 12 回障害科学

学会にて柘植先生の企画講演会「障害者政策・特別支援教育政策の動向と学術研究の役割」を受講した。

第一に、柘植先生は研究と実践と政策との関係性について説明した。アメリカでは障害者政策形成過程には障害者が多く参加していて、それによって政策が作成されたと先生が例を挙げた。それで、政策は科学的な実践の積み重ねだと言われても良い。先生は講演会では何度もエビデンスに言及した。「エビデンスに基づく保健政策」が挙げられた。エビデンスとは、医学及び保健医療の分野では、ある治療法がある病気・症状に対して効果があることを示す証拠や検証結果・臨床結果を指している。

最近の注目点として、G7 伊勢志摩サミット 2016 における G7 教育大臣会議による倉敷宣言が挙げられる。世界の国々ではエビデンスに基づく政策作成について力を入れていて、日本でもそれに向けて取り込んでいると柘植先生が説明した。

第二に、先生は近年における障害者政策特別支援教育政策の動向について説明した。内閣府による障害者政策委員会、障害者差別解消協議会の設置等の推進に向けた検討会、文部科学省による中央教育審議会、教育振興基本計画部会、高等学校における特別支援教育の推進に関する調査研究協力者会議、厚生労働省による障害児通所支援に関するガイドライン策定検討会、発達障害議連による発達障害支援法の改正に向けた会議などが挙げられる。いずれも先生が関連されている。

第三に、先生は今後期待される学術研究を説明した。まだよくわかっていない研究が多くあると指摘された。例えば 高校における通級による指導の効果がどうなのか、指導方法はどうすればよいかなどである。そして 10 年前に成立した発達障害者支援法はどのように改正したらいいのか、教育政策はどのように形成されるべきなのか、日本の特別支援教育の終点はどこなのか 2E 教育の問題など、先生がそれについての期待を語った。

最後に、柘植先生は EBEP 時代に向けた今後必要と思われる政策形成や政策推進について説明し

た。学術研究の役割や期待は大きくなっていくと先生は考えていて、政策形成や政策を推進するためのエビデンスがいっそう必要だとされている。これから修士論文に向けて、もっと政策形成や政策を推進するのに役に立つエビデンスに力を入れようと考えている。



柘植先生ご講演の様子

研究室紹介 茨城大学教育学部

障害児教育教室 細川研究室

茨城大学教育学部

細川美由紀

茨城大学教育学部は、水戸駅からバスで 30 分ほどの場所に位置する、茨城大学水戸キャンパス内にあります。キャンパスの象徴ともなっているのが、正門から入って目の前にある図書館です。この図書館は 3 年前にリニューアルされ、ライブラリー・カフェとして地元の有名店である「SAZA コーヒー」が出店しています。筑波大学の中央図書館にもスターバックスコーヒーが併設されていますが、学内で美味しいコーヒーが飲める環境にあるのは、とても恵まれていると思います。

私が所属する障害児教育教室では、6 名の教員が学部生である特別支援教育コースの学生 80 名に加

え、特別支援教育特別専攻科（1種免コース・専修免コース）ならびに教育学研究科障害児教育専攻の大学院生の指導にあたっています。教室内の研究室は教育研・心理研・生理研の3つの分野に分かれており、私の研究室は中でも心理研として位置づけられています。

私が茨城大学に2015年に着任してから、ちょうど2年が過ぎました。この2年間で卒論8名、特専の修了研究9名、内地留学生2名の指導にあたりました。研究テーマは「幼児期における他者意図理解の発達」や「ASD傾向と不安・抑うつとの関係」、「特別支援学校におけるグループワーク」など、多岐にわたっています。その中で私も学生さんと共に学び、時には一緒に悩みながら指導を進めてきました。卒論に関しては3年生の前期から研究法の授業がスタートし、4年生になる直前の春休みに教室全体で1泊2日の合宿をし、その中でデザイン発表を行います。この合宿は教室の恒例行事として十数年にわたり継続して行われています。また、過去の先輩たちの卒論や卒論抄録は、研究室間の垣根を超えて気軽に閲覧できる環境にあるなど、教室で培われてきた良き伝統に支えられ、私の研究室の学生さんたちも、立派に卒論を仕上げ卒業していきました。

筑波大学大学院在学中は、自身が在学していた前川研究室のメンバーだけでなく、他の研究室の人たちとも（時にはビールを飲みながら）お互いの研究のこと、障害児教育のことなど、色々な話をするなかでたくさんの刺激を受けたことが今でも良い思い出となって残っています。そのため今の研究室の学生さんたちにも、自分の研究だけでなく、仲間の研究のお手伝いや議論に積極的に参加することや、

研究以外の交流も図ることで多くの刺激を得て成長してほしいと願っております。そして私自身、学生さんの卒論執筆や教育実習、進路決定などへ向けられた真摯な姿勢にたくさんの刺激をもらいながら仕事をさせていただいていることに日々、幸せを感じております。



茨城大学の図書館



障害児教育研究集録と内地留学報告書。研究集録には卒論・修論・特専の修了研究要旨が集録されています。

会員・同窓生書籍紹介

小淵千絵・原島恒夫（2016.11.18）
きこえているのにわからない APD[聴覚情報処理障害]の理解と支援

(学苑社)[定価 2376 円 (税込)]

「音はきこえてくるが、ことばとしてききとれない」「雑音の中では何を言っているのかわからない」というような、聴力が正常とされているにも関わらず、ききとり困難を抱える人たちの症状、評価そして支援まで解説されています（学苑社 HP より抜粋）。



【編集後記】

本号で Web ページ上での掲載は4回目となります。四日市会長の巻頭言を始め、盛り沢山の内容を掲載することができました。引き続き、会員のみならず、本学会や障害科学に関心をもたれる多くの方々にご覧いただけることを願っております。また、会員のみならずの周辺で本学会に興味をお持ちいただける方に、本号をご紹介いただければ大変ありがたく存じます。入会いただくにあたっては、併せて本学会ホームページにある、入会案内もご参照下さい。 <http://www.adsj.gr.jp/>

最後に、本号の大会報告は、主に大学院人間総合科学研究科障害科学専攻博士前期課程学生のレポートから構成されています。学生の学びの場としてもご協力いただき、ありがとうございました。

障害科学学会会報 Vo:11
発行責任者 四日市 章
編集・発行 障害科学学会
〒 305-0836 茨城県つくば市山中 152-4
前田印刷株式会社筑波支店内
• E-mail : info@adsj.gr.jp
2017年3月31日発行 (年1回)

事務局からのお知らせ

事務局からのお知らせ

●会員状況（平成29年2月13日現在）

会員総数：716名

内訳：一般会員441名，学生会員218名，学域会員43名，海外会員14名

●新入会員（22名）

一般会員（7名）

学生会員（15名）

上記の会員は，障害科学学会第12回大会総会（平成29年3月4日）において，入会が承認されました。

●退会会員

一般会員（3名）

●会費未納の方へ

会費未納の方は以下の口座にお振り込み下さい。会費は，一般会員2,000円，学生会員1,000円です。

*ゆうちょ銀行振替口座

（名義）障害科学学会

（口座番号）00170-9-615075

他行からの振込 ○ー九（ゼロイチキユウ）店 当座 0615075

※ 通信欄に入会者の「お名前と年会費」を明記下さい。

※ 未納分をお支払いいただく場合には、支払う年度を明記ください。

●事務局メールアドレスの変更

事務局メールアドレスが以下に変更となりました。

info@adsj.gr.jp